



## 海外経験の残像

(井上隆司)

皆様の原稿を拝見して、感服しています。私には土木屋としての大工事やその他の体験がありません。建設省という職場において、河川、ダム関係業務が主ですが、その中で予算、計画・設計、監督、検査、管理などの一端を担当していましたので、危険も少ないですし、大きな感動も経験していません。公務員の方は大部分そのようであると思います。

そこで、この間、海外での業務経験（JICA 専門家）で特に記憶に残ることを紹介して、原稿依頼に応えたいと思います。

(フィリピン) 1980—1982 (3年間)

JICA の河川改修の専門家として従事した。日本と同様水害が多く発生する国である。

1つは、当時日本でも時々話題になっていた役人の汚職である。時効が成立しているので、あえて記述するものであるがフィリピンではマルコス大統領以下各省庁の高級役人の恒常的な汚職である。確たる証拠をもっていないが、私が直接、間接、民間人や公的機関の人から聞いている。公共工事を受注する場合、工事見積価格に25%上乗せして受注する。20%はマラカニアン宮殿（大統領府）に納入し、5%は各省庁の役人に御礼として渡していると言われている。世界銀行、ADB、OECD 等の貸し付け、日本及び他の国の無償援助による公共工事が多く行われていたので、事実とすれば相当多くの賄賂金額である。私は日本大使館、OECD へ事実を調べ対処するよう依頼したが、証拠が難しい事、内政干渉になる等理由に対応していない。そのことに気はついてはいたようである。国の財政は貧しくて給料は安くても、大統領以下高級役人の豪華な住宅や贅沢な生活はそのためかも知れない。近年のフィリピン実情は知りませんが、少なくとも、日本国民の税金が使用されている援助であれば、世界中の開発途上国においてもこのようなことが生じないように監視していく必要がある。近年においても他国であるがそのような噂は後を絶たない。

2つは、在任中の日本の無償援助の病院の建設である。これも間接情報である。無償援助の場合、日本の建設関係会社が競争入札で決定される。3階建ての大きな病院1棟の無償援助である。フィリピンの知人によれば、政府は勿論、国民も大変感謝しているとの事。この工事の一部はフィリピンの建設会社が下請けをしており、この建設会社は大きなホテルや銀行の建設経験もあるようで、もしフィリピンの建設会社がこの費用で請け負うと同様の病院が3棟建設可能であるというのです。つまり2棟追加になるとの事です。当時このへんの事情の知識の浅い私にはただ驚くばかりでした。上記の賄賂の関係か？品質の問題か、日本企業の保護か、外国での建設費リスクか、25年も前のことなので記憶も定かでないが、その後の私の知見ではある程度真実であるように思われる。近年ではこのような問題は相当改善されていると聞いている。

(ネパール) 1992—1995 (3年間)

河川モデル工事について

私の勤務していた治水砂防技術センター（DPTC）の調査費予算は少しはあるが工事費は全く不足する。ネパール政府にもそのような予算はない。そのとき、KRⅡ予算が話題になった。KRⅡ予算は食糧増産を側面から支援するため、肥料、農薬、農業機械といった食糧生産資機材の調達資金を無償供与するもので、日本政府は毎年ネパール政府に約3億円程度の支援を行っていたようである。そこで、DPTCが計画している河川モデル工事は直接食糧増産には寄与しないが、洪水等による田畑の流失、冠水による被害を防御するので、間接的ではあるが食糧増産に寄与するのは確かである。

そこでネパール政府灌漑局は、この点に目をつけ従来から日本大使館にこの予算を河川工事にも使用要請していたが、条件に合わないということで、許可にならなかった経緯があった。そこで、DPTC内で私達が考えたことは、このプロジェクトの技術援助も日本政府が実施するものであり、このモデル工事が実施できないことになれば、ブルドーザー、ショベル等の無償貸与建設機械の活用を含め、技術援助計画の効果が半減しかねない。それで、ネパール日本大使館の担当書記官へ、河川モデル工事の目的、概要、予算額（1.5億円）、工期（3年）等の調書を作成して、KRⅡ予算の流用の依頼を行った。担当書記官（農林省出身）はこれらの事情を斟酌し本省に紹介したようである。後日その返答があり、ネパール政府から正式要請があれば、日本大使館は拒否しませんとのことであった。縦割り行政が危惧された中、大変嬉しい知らせであった。ネパール政府の正式要請をC/Pに伝えた。モデル工事の一つであるマハカリ川の築堤工事の調査に出張した折、地元出身の国会議員（共産党）、町村長、灌漑局の出先事務所から、工事の陳情を受けた。上記の事情を説明し、日本国内の事例を交え、マハカリ川の地元からも、カトマンズの水資源省等に予算陳情するように勧めた。今までその様な要請は習慣としてもない。特に国会議員は野党の立場であるが、重要性を認識して、関係部局に陳情すると約束してくれた。

しかして、KRⅡ予算の使用が可能になり、ネ政府の予算であるので、ネ政府の契約事務に沿って、請負契約が実行されることとなった。

少し細部になるが工事の概要を説明する。

マハカリ川はネパール国の最西部に位置して、河川のほぼ中央がインドとの国境である。マハカリ川右岸側のドダラ・チャンダニ地区は無堤地区であり、毎年のように洪水による河岸浸食で土地が減少し、時々冠水して農地、家屋に被害が発生していた。地元の強い要請をうけて河川モデル工事個所として決定したので用地補償問題はない。計画個所の直上流にインド政府の取水大堰が河川全体を横断しているので、ある程度信頼できる放流量データが約30年あった。この資料より、確率1/50で15,000m<sup>3</sup>/sの計画高水流量とした。堤体断面設計は通常のものであるが堤防の余裕高は日本の基準では2.0mであるが、ここでは1.0mとした。堤防高は3m～8m、延長を優先させるため、既設河岸沿いに曲線の法線とした。

また、堤体材料は全て河床材料とし経済性を重視して、新設堤防を出来るだけ長くするように考えた。完成延長は約30km、初年度は予算5千万円で約3kmであった。工事費は日本国内よりおおよそ1/5程度であったと記憶している。

それから、初年度工事の計画堤防法線上の大木が数本あり、通常は伐採すべきであるが、ネ政府の法律では、環境関係部局との協議で長時間が必要になるとのことで、この時は堤体内に包み込む方法で施工した。その後大木は順調に生育しているであろうか。この工事の計画・設計・施工は大げさに言えば、全て私の意向で実施したと言

えるので感慨深い思い出になっている。 工事着手に際しては、村長をはじめ地元民の感謝の歓迎を受け、花の首飾りをもらい、ご馳走になった。大変感激した記憶がある。 予期していなかったのが日本人は私一人である。 この時の写真が残っていないのが残念である。

私の海外経験はタイ、ラオス、中国、モンゴル、ベトナム、フィリピン、ネパール、バングラデッシュ、ケニヤ、エルサルバドル、ペルーがあるがそのうち多く訪問した下記の国の基本情報を紹介します。

| 国名     | バングラデッシュ                 | ネパール                              | ラオス                     | フィリピン                   |
|--------|--------------------------|-----------------------------------|-------------------------|-------------------------|
| 面積     | 14万4千<br>km <sup>2</sup> | 14万7千km <sup>2</sup>              | 24万km <sup>2</sup>      | 29万940km <sup>2</sup>   |
| 人口     | 1億3,810万人                | 2,350万人                           | 560.9万人                 | 8,624万人                 |
| 首都     | ダッカ                      | カトマンズ                             | ビエンチャン                  | メトロ・マニラ                 |
| 民族     | ベンガル人                    | リンブー、ライ、ネワール、グルン、マガル、タカリー等        | 低地ラオ族（69%）              | マレー人95%、中国系他            |
| 言語     | ベンガル語<br>成人識字 49.6%      | ネパール語<br>成人識字率 53.7%              | ラオス語                    | フィリピノ（タガログ語）が公用語、       |
| 宗教     | イスラム 90%、<br>ヒンズウ 9%     | ヒンドゥー教                            | 仏教                      | カトリック 83%、<br>キリスト教 10% |
| 政体     | 共和制                      | 立憲君主制                             | 人民民主共和制                 | 立憲君主制                   |
| 私の滞在期間 | 1998年頃～短期(1,2月以内)<br>4回  | 1992-1995(3年)、<br>他短期(1月以内)<br>3回 | 1997年頃～短期(1月以内)<br>7回   | 1980-1983(3年)、          |
| 業務内容   | コンサル：道路・橋梁設計の<br>河川水文解析  | 技術援助(JICA 専門家)<br>河川改修            | コンサル：道路・橋梁設計の<br>河川水文解析 | 技術援助(JICA 専門家)<br>河川改修  |

## 井上 隆司さんのプロフィール

1938年生れの68歳、1961年大卒、建設省にて主に河川／ダム関係業務に従事。

勤務先は近畿、関東、沖縄、水資源公団、JICA 専門家等である。退職後はコンサルタント会社で国内／海外業務に従事。CVV 活動にも積極的に参画、アドバイス・グループのグループリーダーである。

待ち合わせると、いつも先に来ておられ、にこやかな笑顔で、私もいま着いたところですよと言われる。このおだやかさは、淀川をこよなく愛し、淀川の自然、環境問題に心を配り、ワンドに生息している、天然記念物で国内希少野生動植物種に指定されているイタセンパラが、年々減少していることを心配している優しい心からきているのであろう。

この「海外経験の残像」の原稿からも伺えるが、広く国外にも目を向けて、海外での活動は11カ国に及ぶ。またCVVでも、工業高等専門学校や大学に出向いて、海外援助に関する出前講義を行い、土木の学生諸君に、海外援助、国際協力に目を向けさせようと努力されている。私もメンバーに加えていただき、このお手伝いをしている。

特にアジアの発展途上国に、日本政府派遣のJICA 専門家などの形で、建設省時代に培った河川業務の専門知識を生かし、積極的に技術協力、技術援助を行っておられる。

しかし、これら発展途上国にも厳しい苦言を呈する正義感あふれる熱血漢でもある。援助金にまつわる政府高官の汚職を嘆き、また、これらの国々も援助に頼りすぎず、自国の発展のために、もっと自分たちも努力すべきと云われる。

もちろん、優しい一面もある。ネパールの子供の里親となり、学費援助をされている。この里親活動協会の理事もつとめておられ、ネパールの子供たちと日本の里親との交流をサポートするために、幾度か自費で出掛けておられる。

まさに退職後を優雅に過ごしている、Nice Veteran Civil Engineer である。

(酒井 豊記)